



参考：国連教育科学文化機関 (UNESCO) 「Education for All Global Monitoring Report 2006」、ほか

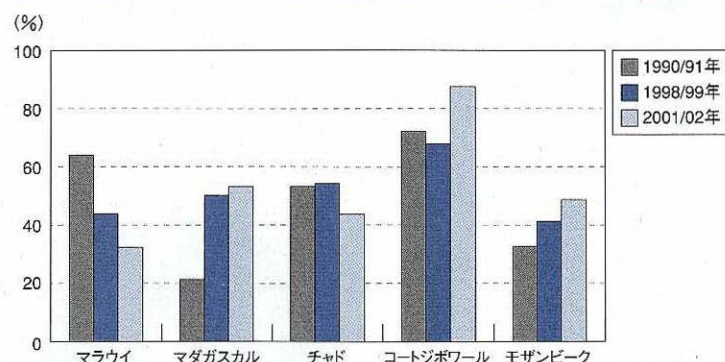
世界の教育事情

B 「教育の質の向上」と国際社会の支援

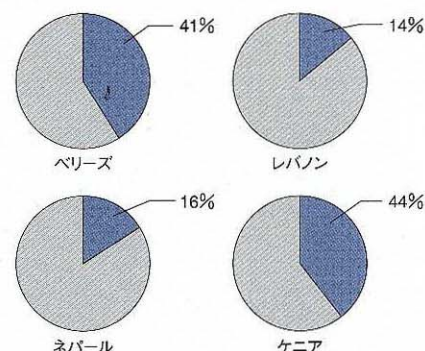
DATA

出典：UNESCO「Education for All Global Monitoring Report 2006」

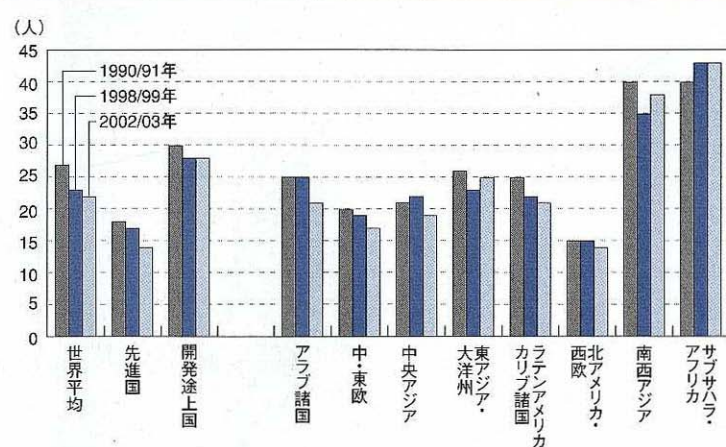
(グラフ1) 小学5年生まで在籍する生徒の割合



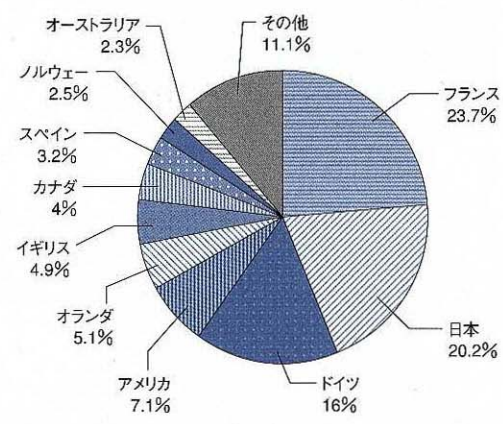
(グラフ2) 訓練を受けた教員の割合 (初等教育 2002/03年)



(グラフ3) 教員1人当たり生徒数 (初等教育)



(グラフ4) 二国間教育支援額の国別割合 (1999~2003年平均)



教育分野への支援に積極的な日本

2000年に採択された「万人のための教育 (EFA)・ダカール行動の枠組み」には、EFAの実現に向けて6つの目標が設定されている。そのうち、「初等教育の拡充」や「男女格差の解消」については着実な進歩が見られるが、「教育の質の向上」に問題のある国が多く、今のままのペースだと2015年までにすべての目標を達成するのが難しい状況だ。

グラフ1~3は、教育の質を判断するための指標を示している。UNESCOは06年の報告書で、データの得ら

れた133か国中41か国において、小学校の最終学年まで進学できる子どもは全体の3分の2に満たないとしている。また、小学校教員の半数以上が訓練を受けていない国も存在する。教員1人当たりの生徒数も、先進国と途上国とは大きな開きがある。

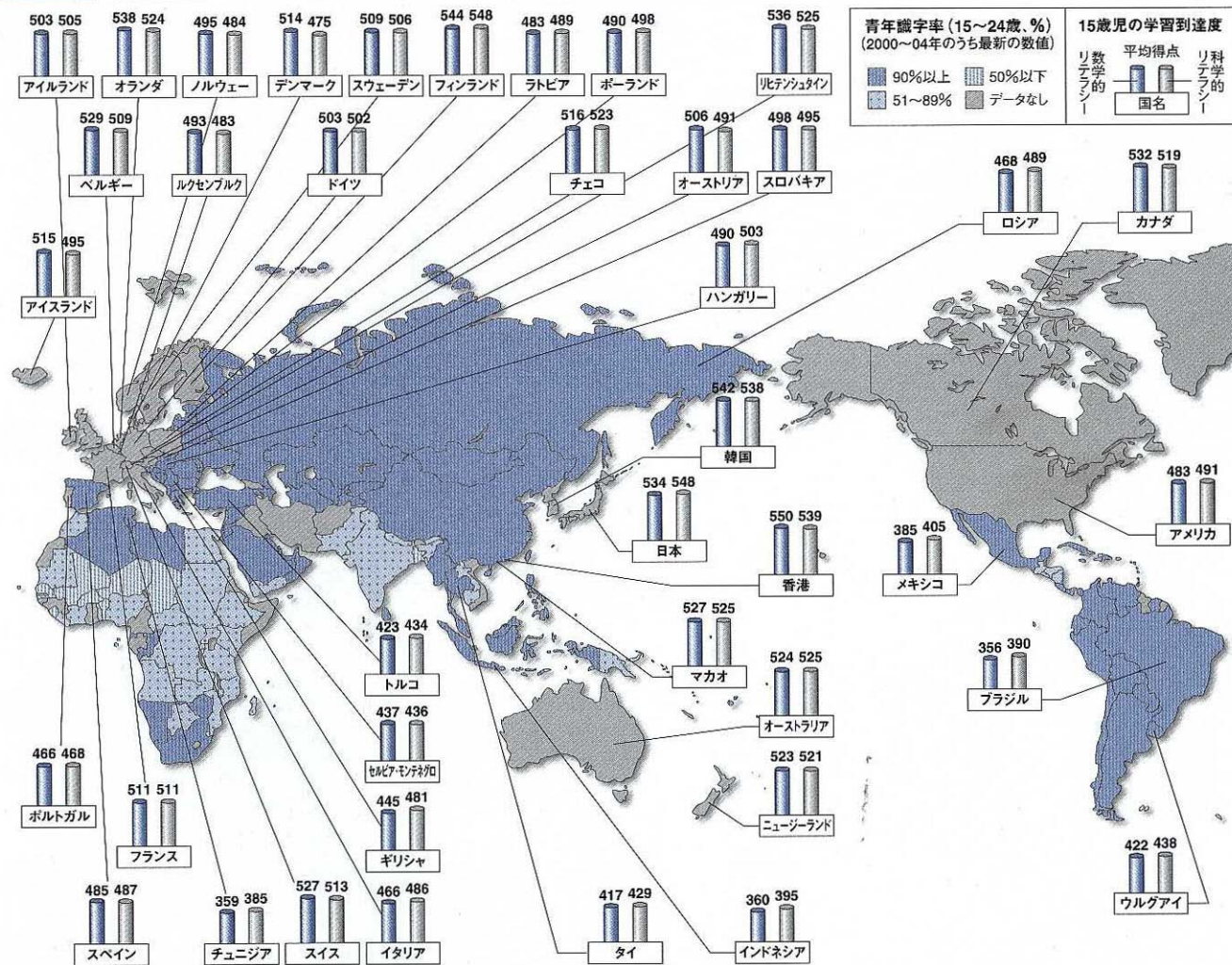
2000年以降、先進国による教育への援助額は増えているが、まだ十分とはいえない。そんな中、日本は02年に「成長のための基礎教育イニシアティブ (BEGIN)」※を発表し、途上国の基礎教育普及や質の向上を積極的に支援している。

※「教育の機会確保」「教育の質向上」「教育のマネジメントの改善」を重点分野とし、相手国の教育セクター開発戦略に基づく総合的アプローチを行っている。

A 青年識字率と15歳児の数学的・科学的リテラシー

DATA

出典：経済協力開発機構 (OECD) 生徒の学習到達度調査 (PISA) 「Learning for Tomorrow's World-First Results from PISA 2003」、UNESCO 「Education for All Global Monitoring Report 2006」



貧困とかかわりの深い識字能力 (リテラシー)

国連教育科学文化機関 (UNESCO) の報告書によると、世界の15歳以上のうち、7億7,000万を超える人々が基本的な識字能力 (読み・書き・計算能力) がなく暮らしている。上の地図の色分けは、15歳から24歳までの各国の識字率を示している。この年齢層の世界平均の識字率は1970年の75%から85%へと増加したにもかかわらず、いまだに1億3,200万人が非識字者だ。識字率と貧困との関係は明らかで、所得の低いサブサハラ・アフリカや南西ア

ジアには識字率の低い国が多く見られる。

「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」とはそれぞれ、「生活のさまざまな場面において、確実な数学的根拠に基づき判断を行う能力」「自然界の変化について理解し、科学的知識を使用して証拠に基づく結論を導き出す能力」のこと。地図上には、経済協力開発機構 (OECD) が2003年に行った各国の15歳児の平均得点を示している。データがあるのは40か国・地域のみだが、途上国と呼ばれる国の点数が低いことが見て取れる。